

生活の伝承 12

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL (024) 535-1111 内線5373



卷頭言 村祀や屋敷に 祀られる神々

私たちのまわりには、いつもお参りしてきた神様がある。稻荷様とか水神様とかは神様の役目らしいことがわかり、國土に住む一人一人に幸を守つて下さるようである。

これに対しても、氏神様や鎮守様にまつられる神々については、わかつてているようでは区別がつけにくい。

氏神様は、かつての一族——佐藤氏とか遠藤氏という集団の中心としての祖先をまつった神社であった。いつてみれば佐藤氏の一族集団の守護神であつた。

ところが、いまではその区別がわからなくなつた鎮守様は、かつてそこに住む人びとが村づくりをするとき、その多くの人たちが、集団の鎮めとしての神をまつり、鎮守の神としておまいりをしてきたのであつた。寺院を建てるときの鎮めとして神をまつるのも鎮守といつた。

しかし、世の中の発展と共に、一族だけが集まつてくらすといふことが失われると、氏神と鎮守が混合して、集落集団の守護神と考えられるようになり、その区別さえ判然としなくなつてしまつたといわれる。

しかし、この両神は、家とか親とか子などの個人の守護神ではなくて、村や町などの集団を守る神として迎えられることが多い。そのためには、鎮守様の幟には、村中安全とか天下泰平などと書くことがあたり前となっていた。

また、家にまつられる神の、うぶすな様(おぼすな様ともいう)や屋敷神はこれとちがい、家族の生れを祀る神としてうぶすな神が祭られ、一戸一戸の家の創立を祈念するために屋敷神がまつられてきたのである。

時がたつにつれて、うぶすな神と屋敷神が家の神であると知つた屋敷の住人が代替りになることが多くなると、家の建設時にあれほど丁寧にまつってきた屋敷神も、次つぎに忘れられて、宮々はいつの間にか片づけられてしまつたのが現状である。

それでも、先祖の思いを忘れずに、今もわら造りの屋敷神をまつる家々が残っていることは有難いことである。

民俗の伝承

物知らざ人 見くらべ角力番付

勧進元
見添

ふんどし帶にしている者
町角を物を食いく歩く者

上の番付は、明治年間の資料に書残されていたもので、私が磐梯町で資料を集めていた頃に発見して写しておいたものである。角力の番付に似せて、世の中に生きている者として「物知らぬ人」としてさげすまれる行為と「不行儀な者」とはどんな行為をする者が見くらべた番付だというのである。

この番付をつくった人たちは、近世の

世に生き抜いてきた人達にちがいないから、その頃の世の中(近世～明治)に、その中で生きていた者としてのモラルとでもいうべきものであろう。

「物知らざ者」の中にある「禮の札を判で出す人」や、不行儀者として「炬燵にあたつて飯食う人」などが大関に位置している。どうが、差あたり現在では納得できないものである。しかし中にはいまでも納得できる不行儀者があるようと思われる。

東 物知らざ者

大関 関脇 小結 前頭

禮の札を判こうにしておく人
人の内をのぞく人
寝ながら人に物言う人
大きなあくびをする人
かぶりものしながら物言う人
やね越しに内を見る人
飯を食いくいのびる人
ことわりなしに人の家に入る人
人の前で裸でいる人
足ゆり伸し炬燵にあたる人
湯はじの上に前だれをしている女
腰掛けている前へ尻向けて腰かける人
書物をしている者へ言葉かける人
買物節の見世物をなぶる人
壁越しに物言う人
人の顔に煙草ふきかける人
(行事)にぎりまらで人に物言う人

西 不行儀者

大関 関脇 小結 前頭

炬燵にあたつて飯食う人
亭主をさしあいで出しやばる人
話の道切る人
飯食つている所でなお話をする人
上の人の前で立ながら話する人
人前に金玉を出す人
人の家に丸裸で入る人
酒によつていて物をたのむ人
他人の家で長居をする人
人中で手ばなかむ人
つまみ食いする人
火鉢を我物としてあたる人
前を開いてチンチを出す人
祝酒によつてへどをはく人
箸を置いてせつちんに行く人
我箸に□□□□に物食う人
酒の場で魚ばかりつまんで食う人
(行事)人中でてがらそにへをこく人

□は不明

こうした身のまわりにおこるさまざまなわがままや、他人に対しても示す迷惑とか不快さなどを、こうして笑いながら制してきたとも思われて楽しい資料である。しかも、私は、当時の人がどうがんまり強制されることもなく、いつのまにか成長しつつ普通の人になってきたといふことではなかつたかと思われてならないのである。

上正しからざれば下乱る

斎 藤 久一

今年の年賀状に「辰の年に喜寿を迎えたました『たつ』には辰 龍 建つ立つ 裁つ 絶つ 斷つ があります今世紀最後の年をどの『たつ』をもつて一年の計となすべきか思案の年になりました。」などと書いて出した。

大正・昭和・平成と人間がやつてきて喜寿を迎えて思うに、少年期に教え習つたことは忘れようとしても忘れ得ない。「質実剛健 和衷協同」の文字と言葉がそれで、体質とでもなつているのか。

戦後五十余年、平成もはや十一年経つ

たが、わが国は大変変質してしまった。

昨年、産経新聞社発行の「正論」

九月号に「日の丸のこと・君が代のこと」と題した都立高校の田代京子(ペンネーム)の論文中、精神文化の支柱なき分断国家の項に、「金融崩壊・汚職・賄賂・経済犯・政治腐敗・土下座外交・押金主義・バブル・リストラ・システム金融・賭博依存・性産業跋扈・消費扇動・大量廃業・空缶ポイ捨

て・ダイオキシン汚染・環境破壊・逆差別・偏差値教育・学級崩壊・受験地獄・いじめ・不登校・父権喪失・おやじ刈り・母子密着・家庭崩壊・不倫・離婚・家庭内暴力・幼児虐待・カルト・援助交際・売買春・無差別毒殺・麻薬覚醒剤汚染・暴走・凶悪犯罪・性的虐待・ストーカー・医療過誤、そして伝統的規範の喪失。」などとあります。いずれも現代の新造語である。それにして十六才の高校一年生にしては、鋭い目をもつ憂国の子女と頼もしく感じ入った次第。

ところで、そのほか前出と共に重複する点もあるが、言論・思想・信条・信教・表現の自由や個性人権尊重などの自由主義風潮から、男女とも服装の乱れに始まり怪しげな頭髪の芸能人と臍腹丸出しのタレント、それに憧れる若者たち、ヘアヌード雑誌の氾濫、ピアス・鼻ピアスの若者・性転換(ニューハーフ)の出現、従軍慰安婦問題や南京大虐殺を是認誇大に発表

している文人を自称する人達の自虐史観作家、それを信じて政府高官達、バブル崩壊不況に伴う粉飾決算・脱税・企業倒産・破産・銀行強盗・不良債権・不正過剰融資銀行への公的資金の投入、官官接待・ゼネコン汚職・官民懲着・教育ママ・わいせつ教師・心の病教師・キレる・少年の非行犯罪・小中高生の自殺・自殺者多発(平十一年三万二千余人)・通り魔事件・ひつたり・わが子虐待監禁・親族殺害・セクハラ・ハイジャック・厚底ブーツ流行・携帯電話の普及・無法暴走族・飲酒無免許深夜ドライブ交通事故・宗教法人名の集金教団(オウム真理教・ライフスペース・法華三法行・身代金誘拐・押金弁護士・暴力団抗争・官僚及び地方自治体の汚職・院内感染・密入国船・覚醒剤密入団・拳銃密売買・来日外人の犯罪横行・詐欺横領・ウランをバケツで使用した東海村の放射能MOX臨界事故・警官の不祥事・カタカナ横文字と外国語の頭文字を組

合せた意味不明の企業名や商品名の氾濫・日の丸設置掲揚反対の新聞社・国立一橋大学生らの国旗引き降ろし事件等々の現象報道と新聞活字が、目に付いて仕方がなかつた末法の世紀後半であつた。

そして、新聞には毎日「逮捕」の活字が載らない日はなかつた。

連立内閣は数合わせ。「上正しからざれば下乱る。」で、いつまでも「親方日の丸」気分では、善良な我等国民は大迷惑である。

わが国は、恵まれた風光明媚な気候風土に培かわれて、六六〇年の歴史と伝統文化をもつ先進独立国である。上記のような終りなき下落は許してはならない。

今後どんな新造語が生れ活字になるか注目して、食止めなければならぬが、九十九年を漢字一字で表すと「末」だつたという。

そして、ペイオフを一年延期、迷走オウムの上祐が派出所、十二月三十日雅子妃様の「流産」の報道。かくしてY2K二〇〇〇年問題を残して九十九年は暮れ、そして除夜の鐘とともに二〇〇〇年はスタートした。

地名を調べたことの断片

—大森城周辺の寺院跡・そのほか—

太田 隆夫

昨年（一九九九）秋だったかの新聞記事に、「遅沢の地名、名字にゆかりの集会」ということが掲載されました。会津高田町にある遅沢地区の有志が発起人となって、各地の遅沢という土地に住み「遅沢」を名字にしている方々が集まつて、由来、歴史、伝承を話し合い、交流をもつという企画でした。

この「遅沢」という地名は、福島市小田にもあります。県道の福島—水原線を、大森地区を経由して南進し、福島市クレー射撃場への分岐点の集落が「おそざわ」です。

「遅沢」という地名の由来は、もう日本では絶滅したらしいといわれている「ニホンカワウソ」の棲む沢が語源とされています。「カワウソ—獺」のこ

とを、昔は「オソ」と呼んだといわれ、

ぶだけです。

「オソ」が棲んでいる沢として「オソザワ」と称し、ここに「遅」という文字を当て、「遅沢」としたようです。

カワオソの文字「獺」の訓みは、『大字典』ではカワオソとしてあります。また『漢和辞典』では、カワウソあるいはオソとしてますので、昔はこのオソの名前で通用していたことを確められました。

私はオソとしてます。耳にひびく音声、音韻を聴いて判断し、理解しています。耳に直接的に、漢字が入ってきたり、カナ文字が届くのではないことは当たり前です。

検地帳、地頭（家臣）への領主からの所領安堵状（あんどじょう）や充行状（あてがいじょう）、集落ごとの水論、山論、土地名寄帳などに、文字を書きこむ必要から、漢字を当てて表記し、今日の地名—字名となつたものと思いま

る言葉は、耳にひびく音声、音韻を聴いて判断し、理解しています。耳に直接的に、漢字が入ってきたり、カナ文字が届くのではないことは当たり前です。聞いた文字を書くときに、漢字やひらがな、カタカナに分類して表記し、伝えていきます。

地名のはじまりは、土地に住みついた人々が、仲間との共通理解と共同意識から、呼び習わしてきた符丁名だったと思います。それがやがて莊園絵図、

ます。

「オソザワ」の例を初めに掲げまし

たが、福島市民家園に移築され、福島県指定文化財になつてゐる「旧奈良輪

家住宅」は、以前の所在地は福島市山田字城裏口という土地でした。

字城裏口は、中世の信夫郡の府城であつた大森城の西側に位置しています。それで城の裏門（搦手口）に当たるところから、この地名となつたと、文字を見て判断してしまいます。

けれども「城裏口」は、確かに大森城の西側に当たりますが、城郭からは少し距離があり、城の裏口に比定出来なくはないのですが、城郭研究家であれば、首をひねるのは二回位では足りないよう思います。

「城裏口」の由来は、大森城の裏口という立地条件からの名称ではなくて、実は中世のころ、ここに寺院があつた



ことを伝えている地名なのでした。こ

の寺の名前は「常楽寺」と称した密教系の寺院だったといわれています。

この「常楽寺」の発音は「ジヨウラクジ」であり、現在の地名「城裏口」は「じょううらぐち」が文字通りの音声ですが、地元では「ジヨウラグチ」と言つております。このことは福島市発行の『地区分類表』でも、字名のふりがなに「ジヨウラグチ」を採用していま

す。

常楽寺があつた場所なので、古くから寺の名前が地名として村人に呼び習わされてきたのに、寺が無くなつて、地名を裏付ける具体的な立地条件が消えてしまつたとき、誰かがすぐ東側にある大森城山に、地名の発生を結びつけ、好条件の文字を当てたのでしょう。

つまり常楽寺「ジヨウラクジ」の歴史的条件を基に、この発音をそのままとしながら、大森城裏門の方角と位置づけをつなげ「城裏口」の文字を当て、「じょううらぐち」と読まないで、寺の名称と全く同じ発言（厳密にみると、最後の二音が「クジ」から「グチ」になつっています）でもつて、現在まで伝承の中心としてきたものと考えます。

常楽寺は、中世から近世へと代る文

大森城五万石を領した城主木村吉清が、

杉目城に移つて「福島城」としたとき、新しい町づくりのため従つた大森の寺院、町屋の一つとして福島に移転し、その後廢寺となつたと伝わっています。

常楽寺のあつた場所には、いまも石造地蔵菩薩立像や五輪石塔残欠、大日如來の種子をもつ年不詳の供養塔があります。また福島市指定有形文化財の「城裏口」の石造供養塔（文永八年・一二七一年銘）は、旧奈良輪家住宅があつた三十米もの南側に、約八百三十年の歳月に洗われながら、私どもに何かを語りかけています。また近くの好国寺という寺は、昔の「常楽寺」の名残りを伝え創建されたと伝えています。

東覚寺が建てられた最初の土地は、小田字程平の場所で、ここは戦国時代の信夫郡八丁目城（現市内松川町）から伊達十五代晴宗以来の居城の米沢城へ向う「米沢街道」が通る土地でした。そして現在も「ホンデラ」と言つています。

東覚寺が建てられた最初の土地は、小田字程平の場所で、ここは戦国時代の信夫郡八丁目城（現市内松川町）から伊達十五代晴宗以来の居城の米沢城へ向う「米沢街道」が通る土地でした。そして現在も「ホンデラ」と言つています。

「ホンデラ」という発音は、もともと東覚寺があつた所としての「本寺」の意味でしたが、行政の仕組みが近代化へ進むときに、この発音は方言読みと受け取られて、「ホンデラ」に漢字の表記の「程平」を当て、「ほどたいら」と改めてしまつた、という地名物語があります。もう最近は漢字地名から「ほどたいら」と呼称され、「ホンデラ」

禄元年から二年（一五九一～九二）に、

このなかでも飯坂の天王寺、上鳥渡

の発音は年輩の会話だけに通用し、絶滅寸前の状況となっています。

それから寺院に関する地名として、この市内小田地区に、もう一例が残っています。小田字高福内（こうふくうち）という土地にまつわる言い伝えのことです。

永正十年（一五二三）に、伊達十四代稙宗（たねむね）が、家臣桜田彦三郎敏に命じて、この小田地区（むかしは信夫郡小倉村）に、曹洞宗の陽林寺を建立させました。この陽林寺は現在福島市史跡、名勝になつていて、伝来の「伊達稙宗棟役免除状」などは、同じく有形文化財に指定されています。

陽林寺の寺勢が盛んなころ、子院として陽林寺の近くに「朝日山高福寺」と「夕日山天福寺」が建てられ、伊達氏家臣や所領内外への関連機関として、寺院としての役割と機能を果していましたと言われています。

小田字高福内には、陽林寺子院の「朝日山高福寺」があつた場所なので、後世廢寺になつたとき、「こうふくうち」として、「高福内」の漢字を当てたのでしょうか。現在民家の持仏堂のよう残る小さな阿弥陀堂には、本尊佛の木造立像のほか、五輪石塔が五つ、六

つ軒下に傾いて往時を物語っています。

文字では「高福内、こうふくうち」ですが地元では、昔ここに高福寺があったことを先祖の刷り込みをうけて「コウフクジ」という発音から脱け切れないでいます。地名の成立要因に流れている歴史的背景が、まだ細々と生きていることが感じられます。

なお陽林寺の附属寺院で、もう一つの夕日山天福寺跡は、小田字杉ノ内地内と伝えられています。が地名は「天福寺」とは全く縁のない「杉ノ内」な

のですが、幸いここには江戸時代中ごろの宝暦年間に「天福寺供養塔」の碑が造立されて、面影を伝えています。陽林寺に縁りのある高福寺と天福寺から、もう一カ寺陽林寺関係の寺と地名を思い出しました。それは現在市内平石の陽泰寺のことです。いま陽泰寺の以前の位置は、平石字元寺のところ、文字通りの場所にあつたと伝え、米沢街道に近い立地条件にありました。

この陽泰寺を建てた人物は、伊達氏の家臣で本領は伊達郡牛坂村（現靈山町地内）にいた牛坂氏でした。天文二十二年（一五五三）一月、伊達十五代晴宗から、信夫郡平沢村に土地を与えられた者に牛坂左馬允（さまでした。中世、時宗（じしゆう・時衆）のなかで、大正初期に地域の神社が統合されて「平石神社」となり、伝統ある香取明神の称号は、陽泰寺の山号と

允かその子どもかが、与えられた平沢村に陽林寺開山の盛南禪師の名声を慕い、その法弟に帰依して建てたのが、元寺（モトデラ）地内の第一次陽泰寺でした。

その後本寺陽林寺は、天正十九年（一五九一）の秋、伊達十七代政宗が伊達・信夫の所領を秀吉に奪われ、蒲生氏郷領となつたとき、氏郷家臣の弾圧で荒廃し、陽泰寺もさびれました。慶長三年（一五九八）信夫郡は上杉景勝の支配地となると、上杉氏は領内の寺院再興に尽力し、陽林寺なども旧領に近い寺勢を取り戻すことができました。このころ信夫郡平沢村の状況は、陽泰寺を開基した地頭の牛坂氏の子孫の、牛坂監物は本寺陽林寺五世薰室和尚を開山に迎え、最初に陽泰寺のあつた元寺地内から、現在の場所に改めて移したといい、監物の位牌が安置されています。第二次陽泰寺の出発でした。移る場所には、平沢村鎮守の香取明神社があつたことから、大沢山陽泰寺の山号寺号を「香取山」と改称したとされています。この香取明神は近代化の寺は一般的に「念佛道場」とか、時宗寺院のある町を「道場町」と呼ばれていました。

伊達成実は大森城麓の内町地内に、月牌料の土地を寄進し、称念寺を建てました。中世、時宗（じしゆう・時衆）の寺は一般的に「念佛道場」とか、時宗寺院のある町を「道場町」と呼ばれていました。

このことから大森地内の字「道場前」

は、二本松城下にあつた時宗二松山称念寺が、政宗の二本松畠山氏攻撃のとき、この地へ難を避けた歴史を「ドウジヨウマエ」という地名で伝え、その歴史背景を物語ついて、私たちが想像する道場即剣道場、または柔道場を示している言葉でないことを知つてほしいと思います。

とここまで、大森城跡の周辺にあつたという寺を、地名から追いかけてみました。話題が固苦しい内容となりましたので、口直しとして別なことを目を移して、拙ない文章を終りとします。

市内に「ソリマチ」という地名がつて、これは古代から中世にかけての「焼畑耕作」のことを伝えるといわれています。それで拾いあげてみますと、

素利町（黒岩）、雪舟町（飯坂）、反町（東湯野）、雪舟田（立子山）など見つかりました。飯坂と立子山の表記は「雪の舟→櫛→そり」ということで、日本の水墨画家の雪舟という人物には、全く関係ないことのようです。

また「焼畑農業」では「カノ」という言葉もあつたとされ、「鹿野」とか「狩野」の文字を当てて、福島市の地名にその例がありますが、別の機会と

します。

それから市内には一つの地域にだけひろがります。市内の渡利には植物地名の多いところで、現在「花見山公園」を知らない人はいない程ですが、先人たちはこれを予見して、地名としていたように思つたりします。

椿館、柳小路、梅ノ木畠、榎田、柳沢、桜清水、牡丹入、萩平、躑躅山、

匂莢窪（さいかちくぼ）、笠松、梅平、松保、胡桃沢、蔽下、大豆塚、若林、天梅、など拾うことができます。また、飯坂町湯野には、蓬畑、茨野（いばらの）、離松、川風、雲雀野、花川、君沢、浦湊、沢緑、影畑、風越、鶯田、林影、若島、岬、樟畑、落水、柳溪（やなぎけい）、音ヶ森、川裾、蔽添と、古典文学の言葉のような地名がありま

す。

そして松川町浅川には動物の地名が

あつて、いま自然との共生なんて声高に唱和していますが、もう思想の「前だおし」を、土地の先人たちは暮らしの中で実践してきたことを知ります。狸入、狸石、牛ヶ久保、鶴峯（うづらみね）、蛇森、狐石、兎田、熊野、狸山、兎窪、馬場、鹿野、長蛇久保（ちょうじやくぼ）、狼久保などです。

郵便物の宛名は、いまワープロ印字

浅川の「狼久保」は、その昔このあたりにもオオカミが棲んでいたことを示している地名のように思います。市内にはここだけでなく、狼ヶ窪（渡利）、

大戊ヶ森（おおいぬがもり—岡島）、笈カ森（おいがもり—大波）、狼山（小田）、狼ヶ森（おいがもり）があり、昔はオオカミは山ノ神の使いだから、オオカミと言えずにオイノと呼称したと伝えています。

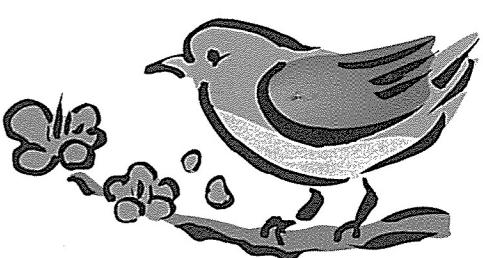
市内庄野にはどうしてなのか「屋敷」

のつく地名が沢山あつて、土地の色合いを物語っています。一合内屋敷、南川原屋敷、地武内屋敷（じぶうちやしき）、立屋敷、川原屋敷、辻屋敷、茶畠屋敷、竹ノ内屋敷、前古屋屋敷、平合内屋敷、とあり、びっくりするのは「大夫五郎内堂田屋敷」—たゆうごろうう

ちどうでんやしき」と十五字の発音を持った地名です。

戦国時代の片隅で、武士であつた「大夫五郎」なる人物が、在郷としてこに居を構え、周辺に耕地を開き、何人かの名子を従えていた情景が、長い発聲音の地名から浮かんでくるようです。映画「七人の侍」の一シーンを思い出します。

ですが、むかしのように筆で書くときは、途中で墨をつけないと字がかかれてしまうほど「大夫五郎内堂田屋敷」は、重量感ある地名で、私は秘かなファンとなつてしまつたほどです。



「年中行事」と「晴ケ」

片平春夫

私は正月の初詣やお盆・彼岸などの墓参りなどを特に年中行事として感じないままに過ごしていた。家では特に目新しいことをするわけでも無くさりげなく行われた。

子供の頃、祖父が隣りに住んでいた。土建業で大工さんや人夫がいつも出入りしており、暮れには木小屋に大勢集まつて餅つきをし、その餅で正月を祝つた。正月には宅宝院の法印さまが来て、和紙をまな板の上に置き出刃包丁で切り抜きを作り、その紙を祖父の家では神棚に飾つていた様な気がする。残念ながらどんな模様であつたか記憶に無い。法印さまはお酒好きで、直会には酒を飲みながら「八百屋お七」の戯歌を歌い愉快に過ごしていくのが毎年のことであつた。餅つきも切紙も子供心に見ているのは楽しいことであつた。

戦時中の企業統制により他の組と合併させられて会社になつてから、餅つきも切紙も見られなくなり、餅つきは賃餅に替つた。

小正月には近所のガキ大将につられて「団子食えでコッコ」にゆき、厄年の家から凧や紙風船、お菓子を

貰い喜んで帰つたものだつた。これが「かせどり」という行事であつたとは長じて知つたことであつた。

正月は新年を迎えたな出発を祝うとともに、一年間幸福で安全な生活を願うという特別の意味があり、特に記憶に残るものであつた。

桃の節句、端午の節句、七夕、名月さま、お祭りなどを行事として考えたことは無かつたが、これらの日は普段より良いおかずが出て、赤飯や替り御飯がでる「駆走のある日」であり、「晴れ着を着る日」でもあつた。終戦前後の何年間かは食糧難で

「駆走のある日」は夢となつた、それでも僅かの量ではあつたが混ぜものない白米の御飯が出されたのを覚えている。

その後仙台に行つたため家庭の行事とは無縁に過ごすことになつた。数年後に帰つて来た福島の町には年中行事の姿を感じられなくなつていたが、農村部ではまだ年中行事が続けられていた。そして五穀豊穣の願いが行事を支えていることを知つた。

「褒」「裏」「囊」などである。

誰でもが経験したことであろうが、小学生か中学生の頃漢字遊びがはやっていた。例えば「にんべん」の字

活の区切りで新たな生活に励む切掛けとなるものとしての認識しか無かつたのだが、農業生産と結び付いた行事であることを知つたのは大きな発見でもあつた。そしてこれらの日は「ケ」であることも知つた。



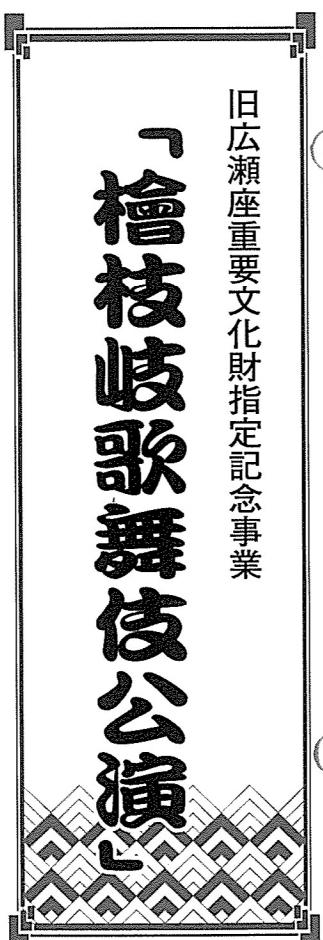
を交互に書いて知つてゐる字が無くなつたら負けとなる遊びである。この遊びを通じて多くの字を覚えることができたような気がする。「褻」という字もこの遊びのなかで覚えた字かも知れない。

「褻」は「普段着」の意味と覚えていた。三月五日に行われた「晴の膳」の時秋山先生から「晴の日」は「褻が枯れる→汚れる」に対する特別の日とのお話を聞いて、「褻」のもつ意味を再認識したのであつた。

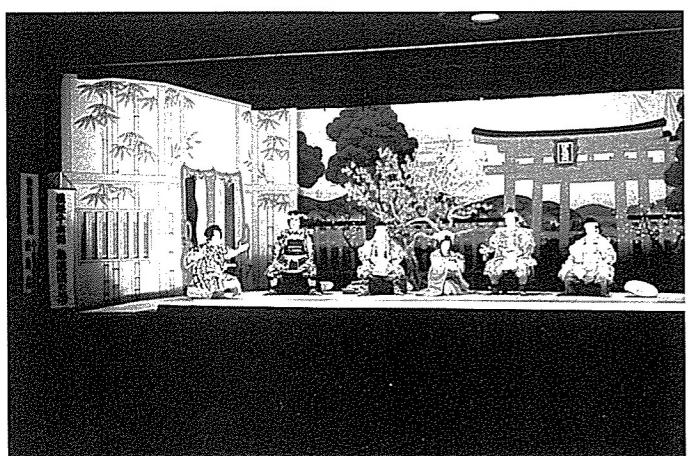
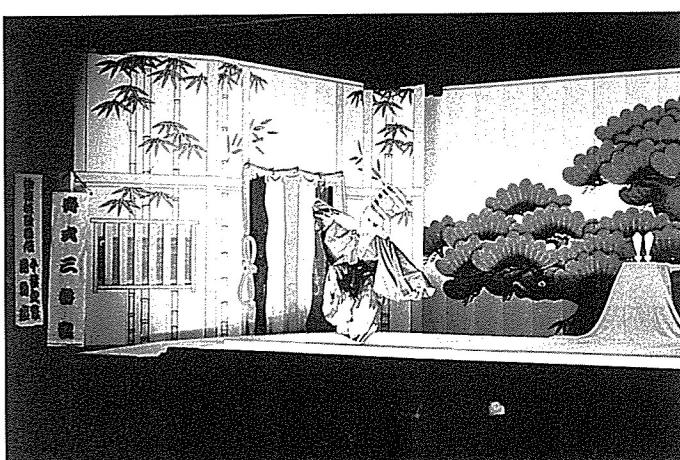
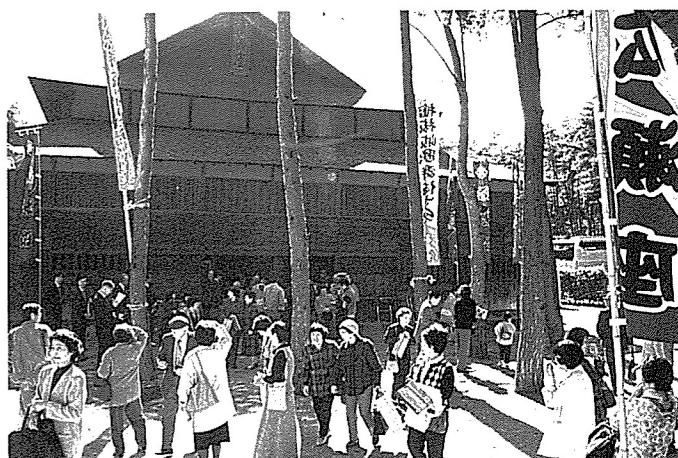
ところで、その日帰宅してから、他の用事で辞書を引いたついでに調べてみた。国語辞典で「け」をみると「褻」はすぐにでてきたが、漢和辞典では「け」の読みは見当たらない。漢読みで「セツ」吳音で「セチ」とある。国語辞典で「け」と引いて見つかったのは、私の持つてている辞書に無いが訓で「ケ」と読むのかも知れない。「普段着」という意味のほかに、「けがれる」「よごれる」「けがらわしい」などと書いてあつた。

「良い」「平常」「悪い(汚れ)」の対語が「晴」と「け」の対語になつていて「け」は「平常」「悪い(汚れ)」を表すことを改めて知つたのである。

旧広瀬座重要文化財指定記念事業



平成十一年十月二十四日、旧広瀬座において民家園に移築復原後初めての公演が行われました。重要文化財指定記念事業としての檜枝岐歌舞伎公演で、七、四倍の抽選による当選者と招待者合わせて四五一人の観衆が、千葉之家花駒座による三番叟と演目「義経千本桜 鳥居前の場」の上演を堪能しました。



平成二年九月五日、わが菩提寺山口の常円寺で「開創四百年記念報恩因
脈授戒会」が執行された折、曹洞宗大本山永平寺貫主丹廉芳禪師(八五)が、
講師の終りに「風邪を引かない法」という自分の体験談を話されました。
『毎朝顔を洗うとき、二回ほど鼻から水を吸込み、勢いよく左右の鼻を
掴みつ鼻をする。いわゆる鼻のお掃除をすることである。』と
何分年をとつた偉い人の話である。何か得るところもあろうかと試して
みた。初めはムズムズして嫌だつたが、十日もしたら抵抗もなく出来るよ
うになつた。よくも鼻の中と鼻毛にはゴミ(鼻クソ)がついているものだ。
そのゴミを水で洗い流し鼻通しをよくするのである。

お蔭さまで、それ以後風邪を引いたことはない。風邪や肺炎予防のため
小生の体験談を一席……。

(斎 藤)

